

二百四十二人(延べ)が活動

平成26年度前期も例年
以上に活動しました。
（4月～9月）の事業が終わりました。



5月25日の水路清掃には33名の参加がありました。

八方原地区にみなさまには多大なご協力頂いたことに感謝申し上げます。
この6ヶ月間に12の事業を行い、のべ242人の参加がありました。それぞれ
の事業に応じた日当をお支払いしたところ、総額は305,000円となりました。
今年度の新しい取り組みのひとつは、地区の盆踊り行事に「八

原の環境を守る会」として参加し、飲食提供をしました。新たな取り組みとして、地元産麦「西の香り」を使った洋菓子を提供したことです。多くの参加者からご好評を頂きました。

今後とも共同作業による環境向上、施設維持、それに地域の魅力向上に努めてまいりたいと思います。

後期の計画も話し合い

10月26日、八方原の環境を守る会の役員会が行われました。前期の活動の日当額について確認をしました。また後期の活動について話し合いました。

例年行ってきた「餅つき体験」も、昨年同様に実施します。

今期の水路改良については高山造庭園さんから八方原橋までの市道沿いの両側となります。予算との兼ね合いでどの箇所をどれだけ行うか検討に入ります。また法人が使用している倉庫付近の排水路の改良も懸案事項です。施設維持の共同作業としては、水路渡り板2カ所を予定します。

また通称「横土手」（谷さん宅から用水ポンプ小屋まで）の草刈りについて現状の作業体制では無理な点もあることから、今後共同作業でやれないかという提案もありました。慎重に検討することとなりました。

トラクターで地中に水路

「カタカタツカタカタツ」トラクターのエンジン音とは別の音が聞こえます。「何じやろうか？」早速行ってみました。
麦の植え付けを控えて、圃場の下に排水用の地下水路を作っていました。水路といっても直径5センチメートルほどの円錐形の道具を牽引しているのです。その作業をスムーズに行うための振動があ音の正体でした。単調な作業ですが、大事な仕事のようなのです。



数十センチの深さを保って牽引

両手を失った詩画作家大野勝彦氏に学ぶ

人権擁護委員 原田茂樹



木漏れ日のなかで

人権擁護委員の研修で熊本県阿蘇山麓の「風の丘阿蘇大野勝彦美術館」にご本人を訪ねる機会を得ました。

26年前、45歳の時にトラクターの回転部分に自分の腕を巻き込まれ、両手の肘から下を失ってしまった大野勝彦さん。大規模農家だったそれまでとは、全く違う道を歩むことになりました。

事故に遭うまで文章を書いたことも絵を描いたことも無かったという人が、病院でのリハビリの合間「生きていく喜び」を言葉にし、それに思うままに絵を添える創作活動をはじめたのです。

事故は母親の目の前で起きました。それを止めることができなかつたことで、母親はその場で倒れてしまいました。その後も普通の暮らしができない状況だったといえます。何とか母親を元気づけようとする約束をしたとい

ます。「母ちゃん、俺は美術館を作るぞ」その約束をしたら、どんどん元気を取り戻して、大野さんご本人は「約束した以上、なんとかせんと」必死に作品を作り、講演会に出かけたとのことでした。

自分自身で義手の改良にも取り組んで来ました。きつと米国にはもつといいものがあるに違いないと自分で改良した義手を持つて、専門家を訪ねたことです。さんさんに動作を見せた

の義手は素晴らしい。たぶん世界最高

だろう。これ以上のものはここではできない。「普通なら少しがっかりのところですが、大野さんは「よしこれが世界最高か。」大いに自信になったと話してくれました。

「手を失って良かったと思います。」聞かされたものがびびりました。「もしも私に手があったら、こうして皆さんに会えることは無いのですからね。」ご本人の言葉は鮮烈です。「もう何一つ、自分一人ではできませんから、誰かに手伝ってもらいます。そのことに常に感謝です。」感謝の笑顔が次の笑顔を呼び、どんどんその輪が広

がってゆきます。

「落ち込んでいる暇は無かつたね。」笑いながら話してくれました。失った両手を見たときに「生きていく。良かった」と思ったそうです。どんなに苦しいときでも、何もかも失つたとしても「笑顔」さえあれば良いのだと断言します。氏の作品のなかに失意のベッドで、見舞いに来た子どもたちに「もうあなたにあげるものは何も無い」と嘆きで始まるものがありました。後半では「この私の笑顔を喜んでくれる人がいる。自分にも人を喜ばせることができる」という喜びの決意で締めくくられていました。

「だいから」での餅つき体験



とき：12月14日（土曜日）午前8時半
ところ：八方原あさいち広場
主催：八方原の環境を守る会・八方原子ども会

作業だけが目的じゃ無いよ

10月19日、市道と公有地の除草作業が行われました。当初は舗装されていない農道を地域で補修していたのが、舗装後も除草作業として続いているものです。各班ごとに場所を分担して行うので、1時間もかからないうちに作業は



終わります。

道路や道沿いの空き地がきれいになることももちろん大事ですが、共同作業することに意味があるようです。作業が一段落すれば、情報交換やらなにやら、笑い声、話し声があちこちで聞こえてきました。